

なぜ、泣かせない必要があるのか? ——“泣かせずに済ませる”は明るい未来の入り口

大阪府開業 こいし歯科
小石 剛

TOPICS

はじめに

「子は宝。いつの時代も変わらない価値観」しかし、「子ども」という概念は近世になってつくられたという。「今日の子どもは、明日の大人。そして明

日の社会」

子どもという発育期には体だけではなく心も育っていくことを改めて認識しよう。

子どもにかかわるということは、われわれ自身が、そして明日の歯科界が明るくなる。子どもは明日の世界そのものなのだから……!

本連載では、これまで子どもを泣かせない方法とその具体的な方法についてご紹介しました。

最終回となる今回は「なぜ、泣かせない必要があるのか」ということについて、事例を交えてお伝えしたいと思います。

TOPICS

なぜ、泣かせない必要があるのか——事例1

Mちゃん4歳6か月。次女。多数う蝕があり食事時に痛がるという。前医では治療ができないと断られたという。

来院時よりすでに大泣きし、待合室でのコミュニケーションも難しい状態であった(①)。他者の治療見学(モデリング)からはじめ(②)、絵カードなどによる見通しをもたせる説明を行い、母親の仕上げ磨きの再

現から診療台に登り(③)、手鏡をもたせて説明しながら診察し応急処置を行った(④)。

その後、出来たことは認めて褒め、術者の喜びをiMessageを用いて伝え、握手を行い笑顔で帰宅させた(⑤)。その後の治療来院時には泣くことも多かったが、帰宅時には少しでも必ず笑顔が見えるように努めた。

その後は定期来院を行い、現在は小学4年生。お菓子好きを自認しながらも自ら減らす努力を行い、すっかりう蝕の再発も治

まった。今では家族でいちばん食生活にうるさいという。そして現在姉とともに矯正治療を頑張っている(⑥、⑦)。

初診より2年ほど後からは母親も通院し始め、間食のコントロールの苦戦話をネタに毎回笑い声を響かせている。母親はう蝕があると自覚しながら歯科恐怖によって学生以来歯科を受診していなかったが、娘たちの見守るなかで多数の治療を乗り越えることができた(⑧)。その後、祖母に次いで父親も定期来院するようになった。



考察

筆者は恩師より「小児歯科は小児期を見る医療ではなく、小児期から見る医療」と教えられてきました。“泣き”に対してまっ

たく対策せずに放置することは、歯科恐怖やトラウマなどを生み出すことが考えられます。「(筆者の)歯科医院には二度と来ない」ならまだ良いですが、「怖くて二度と歯

医者さんに行けない」となると、その子にとって生涯非常に不利益となることが想像されます。歯科を受診した経験がない子が泣くのは、そうした負の経験が親や周りの

人間から伝えられた“恐怖の遺伝”の結果かもしれません。「悪いことをしたら歯医者さん位連れて行くゾ」といった恐怖の対象や脅しに利用されるといったほど悲しいことではないでしょう。歯科恐怖によって親子で口腔崩壊といった“負の連鎖”だけは避けたいものです。

もし泣いたとしても“痛い”“怖い”を極力除去し、子に達成感や勇気といった前向きな心が残せるなら、次回にまた来院できると思います。その前向きな心を“心の貯金”と呼びます。つねに貯金がマイナスではなくプラスになるよう努めていくことが回りの来院につながります。

そして治療計画は、何を目的に・何を見据えて診療をするのか、目的をもって手段を選んでいきます。すなわち、この子に将来どのようになって欲しいのかを考え、緊急性を考慮したうえで治療を進めていくことがポイントであると思います。

TOPICS なぜ、泣かせない必要があるのか——事例2

Tくん2歳1か月。長男。家での歯磨きを大変嫌がるとのことで、母親は緊張した様子であった①。そこで待合室にて母親に声をかけ、問診中には母親の膝の上で遊ぶTくんの時折声かけやスキンシップを

行っていくと、しだいに親子に笑顔が見えてきた。これから行うことを絵カードで説明し、そのまま母親の膝の上で検診を行うことで終始笑顔が見え、とてもスムーズに診察を終えることができた②。しかし、その後の検診では泣くことも多く時には号泣することもあり、その際はとくに笑顔で帰すことに努め、困惑している母親にも安心しT

くんに対して前向きに評価してもらえよう努め、そして繰り返し受診していただいた。数年後、母親は次男を妊娠し、大きなお腹になっても共に歯科検診を続けた。出産後もお腹に次男を抱きながら受診し、現在次男は兄Tくんの頼もしい声援で歯が生える前から歯科検診をスタートさせている③。



考察

筆者は、子どもたちが将来に健康的な自立をすることを目標にしています。子どもたちが自ら健康について考え行動できるためには知識や技術を身につける機会が必要であり、歯科受診をその機会としたいと思っています。そのためには子どもだけでなく、歯科医院に子どもを連れてくる母親か保護者にも安心して来院していただく必要があります。とくに幼い子にとって母親の安心は大きく影響し、逆に子の安心が母親などの安心にもつながります。そのなか

で、心理の発達や成長発達という視点は今できていることを前向きに捉え、保護者と術者が共に再度の受診を受け入れる礎となります。

“痛み・苦しさ”に慣れることは困難ですが、見通しが立たないという不安からの“泣き”は体験を通じて確実に減らすことができます。泣いたとしても結果的に母子ともに“心に貯金”が増えていけば、歯科に対する負のイメージもやがて転換していくことでしょう。

後日談……

卒園式の翌日に来院したTくんの母親より、卒業文集に「将来は歯医者さんになりたい」という書き込みが多くとても驚いた」と聞いた……。

これこそ地域における先生方の努力の賜物でしょう！ もちろんTくんも歯医者さんになりたいと書いてくれました。私も微力ながら歯科の未来やそしてTくんの将来に貢献できたかと思うと本当に晴れ晴れしい気持ちになります。

TOPICS おわりに：泣かせずに済ませる”は、明るい未来の入り口

これまで“泣きの予防”について書かせていただきましたが、私はすべての子を泣かせずに診療できるわけではありません。次こ

そは泣かせまいと反省するなかで、子どもの成長と将来を考え“泣きの先”を見据えることで母親や保護者ともに目標に向かって一步一步前進するように心がけています。

子ども達が健康的に自立し、そして歯科医師が憧れの職業になるためには、まずは“泣かせずに済ませる”ことが入り口であり、

近道に違いありません。そのことを体現できるよう精進してまいります。

子の家族のみならず歯科界においても、未来を明るくする鍵は子どもが握っているのですから！